

2020 年 8 月 2 日（日）「交わりに基づく労働 ～労苦の友の必要性～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:4-6

4 また、私はあらゆる労苦とあらゆる秀でた業を見た。それは仲間に対する妬みによるものである。これもまた空であり、風を追うようなことである。

5 愚かな者は手をこまぬいて、己の身を食い潰す。

6 両手を労苦で満たして風を追うよりも、片手を安らぎで満たすほうが幸い。

《新改訳 2017》伝道者の書 4:4-6

4 私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた空しく、風を追うようなものだ。

5 愚かな者は腕組みをし、自分の身を食いつぶす。

6 片手に安らかさを満たすことは、両手に労苦を満たして風を追うのにまさる。

【序論】

ご一緒に学んでいる「コヘレトの言葉」では、あちこちで「労働」について語られています。その語り口は皮肉に満ちてはいるものの、基本的なスタンスとしては、聖書的な労働観を読者に教えていると言えるでしょう。今日も三つの節のみを扱いますが、この箇所は構造として大変分かりやすくなっています。

①働きすぎの問題（4 節） [競争社会を突き進む道]

②働かざる問題（5 節） [競争社会からの逃避の道]

③適度な労働（6 節） [①と②の中間の道]

以上の構造を念頭に置いて話を進めてまいります。同時に 4 章全体のテーマが「交わり」であるという点を見落とさないようにもしたい（No. 11 の説教参照）。「交わり」とは、人格と人格の関わりを表しますが、働きすぎるところにも、働かないところにも、何らか「交わり」の欠如の問題が潜んでいる。「真の交わりの欠落」と言い換えてもよいでしょう。今日は、その欠落したものを一緒に見つけていきたいと思います。

【本論】

本論 1. 働きすぎの問題（4 節）

また、私はあらゆる労苦とあらゆる秀でた業を見た。それは仲間に対する妬みによるものである。これもまた空であり、風を追うようなことである。（4:4）

今日は再び「労働」の問題を扱うことになりますが、コヘレトは既に 1:12-2:26 で労働の空しさを延々と語ってきました。しかし、今日は更に進んで、「あらゆる労苦」と「あらゆる秀でた業」の動機とはそもそも何なのか、それは「仲間に対する妬み」にあると説明します。

読者は一旦立ち止まり、コヘレトが言っていることが真実であるかどうかを考えてみる必要があるでしょう。そして、自分の中で反論を思い巡らしてみること、テキストの理解を深めるために重要です。特に後者「あらゆる秀でた業」がことごとく妬みから出てきているかどうか、やや疑問が残ります。中には純粋に研究や発明を楽しみ、結果として社会に大きな利益をもたらしているケースもあるからです。前提として認識しておかなくてはならないことは、コヘレトが 100% そうだと言っているのではなく、人間の基本的な傾向とはそういうものだと言っているという点です。

まずは言語の意味を調べてみましょう。「秀でた」と訳された言葉 (קִישְׁרוֹן / キシュローン) は本来名詞で、「成功」「技術」「利益」などという意味を持ちます。「業」という言葉 (מַעֲסֵה / マーセー) は、「行為」「働き」「仕事」「ビジネス」などとも訳されます。新しい技術の発見や習得、ビジネスにおける成功といったイメージが色濃く出ています。

実際、この社会で生きていくと、最初は志高く始めた仕事も、気づけば会社の利益を上げるため、あるいは自分の業績が認められるために、馬車馬のように働いている、ベクトルが違う方向を向いているということがよく起こります。自分が本当にやりたい研究に没頭して一生食べて行ける人はごく稀であり、世界を支配している競争の原理に瞬く間に巻き込まれて身動きが取れなくなってしまうケースが圧倒的に多いのではないのでしょうか。そのような働きに価値がないというのではなく、あまりにもスピードと結果が求められる社会にあって、人間本来の労働の感覚が失われていくことが問題なのです。

IT 革命を経て、かつて手紙でやりとりしていたものは今やメールや SNS になり、海外とのお金のやり取りもネットバンキングで一瞬にして処理される時代です。インターネットはますますスピードが求められ、これからは 5G の時代がやって来でしょう。スマホの普及により、パソコンすら開く手間が省け、やろうと思えば 24 時間、食事をしながらでも仕事ができる。枕元に置いたスマホがいつ鳴るか、就寝時さえ意識から離れない人もいるかもしれません。強いてプライベートの時間を作らなくては、心身共に休むということすら困難な時代なのです。

コヘレトの時代とは確かに破格にスピードが違います。しかし、コヘレトは自分が生きている時代の中でさえ、スピードが倍増されていく現実を見ていたのです。そして、後の時代の人類は一体どうなるのかと心配し、警鐘を鳴らしていました。

スピードが求められるということは即ち、他の誰かよりも先に仕事を達成するということとつながっているでしょう。先に開発し、先に発表し、先に対策を練り、先に行動する。他所^{よそ}に先を越されてしまつては利益が半減するからです。それが人類の歩んできた道なのではないか。

「妬み」(נָאִיז／キンアー) というキーワードが出てきます。これは基本的に否定的な意味で使われる言葉で¹、誰かを傷つけてしまうので「避けるべき態度」として登場します。本質的に、仲間の中でトップに立ちたいという願望であり、この動機は決して満たされることがないので、結果として人は絶え間ない労働の罫目に縛られていく。誰かの成功を素直に喜ぶことができず、あいつよりももっといい仕事をしたい、先に出世したいという焦りに常に支配されている。そもそも社会構造自体がそのような切迫性に追い立てられており、子どもたちの教育課程にまで深く浸透しています。最近はあまり聞かなくなりましたが、私が子どもの頃は「受験戦争」ということがよく言われました。

この問題の本質はどこにあるか。それは結局のところ「交わりの欠如」にあるのです。同僚が真の仲間ではない。事実上の競争相手であり、負けられない相手である。この考え方は信仰共同体にも入り込む危険性があり、信仰において上か下か、どれだけ知識を持っているか、どっちが優れた奉仕をしているか…などということを言い始めたら（考えているとしたら）、それはまさにこの世の原理を持ち込んでいるにほかなりません。ペテロがヨハネを見て「主よ、この人はどうなるのでしょうか」（ヨハネ 21:21）と言った言葉が印象深く思い起こされます。それに対して主は言われました。「私の来るときまで彼が活着していることを、私が望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、私に従いなさい」（ヨハネ 21:22）。信仰の世界においては（それはこの世での生き方／考え方を修正していくのですが）、もっぱら「神の前に自分はどうか」ということを問い続ける。そこには人と人の競争など入る余地もありません。

本論 2. 働かざる問題（5 節）

愚かな者は手をこまぬいて、己の身を食い潰す。（4:5）

コヘレトは、妬みに動機づけられた労働、競争社会を猛進する人間の異常な労働観を一つの「極端」として呈示してきましたが、本節ではその対極にある「怠惰」が戒められています。自分のステータスを獲得するために躍起になった競争社会にうんざりし、浮

¹ 肯定的な意味で使われるのは 2 つのケースにおいてのみ。

① 神と人との関係において（イザヤ 11:13、26:11、詩篇 69:10、ナホム 1:2）

② 結婚における男女の関係において（民数 5:14, 30、箴言 6:34）

世離れした生き方、働くこと自体をやめてしまう人がいます。「働かないで生きていきたい」と理想ばかりを口にし、時間を浪費していく。しかし、収入なしに食べ続ければ、いつか経済的に底をつく日が来るのであって、それが理想的な生き方とは言い難い。神は人間に「地を管理する」責任をお与えになっているからです。どんなに小さなことであっても、神の被造世界の回復のために何らかの責任を負っていかなくてはなりません。

「(手を) こまねく」(קָבַץ／ハーバク)と訳された動詞は、本来「包む」「抱く」「組む」などという意味の言葉で、新改訳 2017 では「腕組みをし」と訳されています。いずれにせよ、何も手出しをせず傍観を決め込むことが表現されているでしょう。しかし、その状態が続くと、やがて「己の身を食い潰す」という恐ろしいことが予告されます。これは、自分の身代を食いつぶしてしまうこと、本当に生き抜く力を失ってしまうことが言われているのでしょう。

ここにもやはり、「交わりの欠如」の問題があると思います。人と人とが協力して何かを造り上げていくという建設的なあり方を捨て、人が孤独に自分だけの世界にこもってしまうことは、「人の間にある」という人間本来の状態から逸脱していると言えるのかもしれない。

先の、競争社会における終わりのなき猛進という狂った労働観も良くなければ、全く働かない状態も良くないということが、コヘレトによって警告されています。では、どうすることがベストなのか。神が人間に求めておられる生き方とは。真理は両者の中間にあるようです。

本論 3. 適度な労働 (6 節)

両手を労苦で満たして風を追うよりも、片手を安らぎで満たすほうが幸い。(4:6)

何が言われているか、やや掴みにくくはありますが、こういうことでしょう。「両手を労苦で満たす」とは、常にピンピンに張り詰めた状態で競争社会を走り続けること。「片手を安らぎで満たす」とは、多くを求めすぎず、生きていくのに必要な分を得ながら、手の届く範囲でやるべきことをやっていくことだと思われます。コヘレトは 5～6 節で、当時流布していたことわざや箴言の聖句を引用しているのですが、特に箴言 17:1 と重なってきます。

一切れの乾いたパンしかなくとも平穩であるのはいけにえの肉で家を満たして争うことにまさる。(箴言 17:1)

人間本来の労働観は、今や失われていると捉えてよいでしょう。これから先の人類史がどうなっていくのか、どこまでスピードが上がっていくのか、私などには想像も及びま

せん。ただ、何千年も前にコヘレトが警鐘を鳴らしていたように、現代に生きる信仰者も人類の未来を憂えて、同質の声を挙げ続ける必要があります。私たちは聖書の真理に戻っていかなくてはなりません。そもそも聖書は人間にどのように働くよう教えていたのでしょうか。十戒の第四戒に耳を傾けましょう。

安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。

しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。

あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である。

主は六日のうちに、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造り、七日目に休息された。

それゆえ、主は安息日を祝福して、これを聖別されたのである。（出エジプト 20:8-11）

ここでは、六日働いたら七日目に休むべきことが教えられています。神様は人間の基本的な生き方の中に「安息日」を定められたのです。それは、人間が働き続けることのできない存在であることをよく知っておられたからです。この「安息」という事柄は、一切の労働をやめ、神に集中することを意味します。私たちの週日の六日間は「世の事」に目が向いています。しかし、一週間のうちの七分の一を「神のもの」として聖別し、本来の人間の状態を取り戻していく作業が必要なのです。私たちは「世」から取り分けられ、狂った弦のチューニングをして、再び世に出ていく。

十戒がイスラエルの民に与えられたタイミングは、エジプトでの奴隷生活から解放され、故郷であるカナン之地へと向かっている途上のことでした。エジプトでの奴隷生活は、まさに休みなく、延々と酷使され、働かされ続ける非人間的な状態でした。神を礼拝するところから引き離された人間の悲劇と言ってもよいでしょう。そういうイスラエルの民に、真の神礼拝が取り戻される必要があったのです。

このことは、現代の私たちの「普通の」生活が、実は奴隷のようなものになっていることを象徴しているとも言えるでしょう。そういう中から私たちは贖われたのです。聖書を知り、真の人間の労働観、安息観が取り戻されつつあります。これは、毎週の礼拝を通して与えられている恵みなのです。神との交わりの回復。人格と人格の本当の交流がここにあります。

【結論】

私たちの日々の生活を今一度見直してみてもどうでしょうか。労働に疲れた者も、何をすればよいか分らなくなった者も、神の許にあってどう生きていけばよいかを教えてくださいることができます。毎週の礼拝を大切に、真に人間らしく生きていくことができればと願います。

【祈り】

安息日の主よ。安息日は人間のために与えられました。人は休むために働いていると言ってもよいのかもしれませんが。神との全き安息を目指して、この世の務めに勤しんでおります。しかし、人には常に「行き過ぎる」危険性があり、労働のための労働となって、休むことを忘れてしまいます。そう、神との交わりそのものが失われていくのです。神との人格的交わりを失うところには、同時に人との人格的交わりの喪失の問題が潜んでいます。地の管理者として立てられた人間が、互いを尊重し合い、各々の賜物を認めて、自分の責任を忠実に果たしていくことができますように。この週を歩んでいくに先立ち、神と共に生きる決意を新たにいたします。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の初めのとき、六日の創造の御業の後、七日目の安息を摂り給うた、父なる神の愛、安息日を人間のためのものとし、神との交わりに最上の意味を持たせ給うた、主イエス・キリストの恵み、

労働と安息の重要性に心を留めさせ、人間らしい生き方へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。